

「盆踊り唄」の比較音楽学的考察

黒 坂 富 治

Comparative Musicological Study of the Bon Festival Dance's Epics

by

Tomiji Kurosaka

昭和46年度から昭和49年度にわたった、「富山県古楽民謡採録採譜事業」で、私が採録した古楽、民謡、わらべ唄などの種目は二百数十件に及んでいる。それらのうちで「盆踊り唄」の数と量はもとより、複雑で多岐にわたる内容は、他の古楽民謡の遠く及ばないところであった。それらの中から一、二抽出して見よう。

- 。「ざんざ」 (ヤーサ サーノ ヨーカノカイー ヤイ)
- 演唱 下新川郡入善町新屋50
盛田文次 ほか
- これは「組踊り」の最終部分に配された、テンポが速く活発で、最も魅力に富む踊りと唄である。演唱時間約13分、歌詞内容は「見真大師」である。
- ㄣハ ザンザー そろわしゃ ガッターノカイノ
(ヤーサ サーノ ヨーカノカイー ヤイ)
- ハ ヨーカ (八日) モカイナラ
ココノカモ (九日) モカイジャ
(ソーリャ マッカイタル マッカイタル)
- マッカイタル カカエタル カッテノシャリヨー
- (ヤーサ サーノ ヨーカノカイー ヤイ)
- ㄣハ ヤーレンナー されば申すも
おーそれながら
天津[○]こやね[○]の命[○]の末[○]に
氏は藤原 大衆方に
(ハー ソーリャ マッカイタル マッカイタル)
- ハ 有[○]のり[○]卿[○]の カッテノシャリヨー
- (ヤーサ サーノ ヨーカノカイー ヤイ)
- ㄣハ ヤーレンナ ^{おんちやくなんし}御嫡男子に
松若君とエ
利巧^{こウ}發明が コリャ ドージャー
イノ 世にならびなき コリャ
大衆方に
(ハ ソリャ マッカイタル マッカイタル)
- ハ マッカイタル カカエタル
カッテノシャリヨー
(ヤーサ サーノ ヨーカノカイー ヤイ)
- ㄣハ ヤーレンナー ^{こし}興や車^で
世をましまさば
君に仕えて^{つが}榮華もきわめ
雲に近きの 大衆方に
御身の上^が カッテノシャリヨー
(以下ハヤシ畧)
- ㄣハ ヨーイ サテ 皆さん方ヨーイ
早くこの世の無常を悟り
^{おんとし}御年九歳の春三月に
玉の御殿^を立ち出で^給い
ㄣ栗田口なる青蓮院の^エ
慈鎮和尚のみもとにまわり
^{あす}明日と延ばさぬこの世の無情
ㄣ咲いた桜も^{こよひ}今宵のうちに

夜半の嵐に吹き落とされる
 ぐこれを思えば片時も早く
 出家得度をして給われと
 言われて師匠も理につまされて
 ぐ夜の中ばに得度をなさる
 たけと等しきみどりの髪を
 御剃り給うぞ 御いたわしや
 ぐ綾や錦を脱ぎ捨て給い
 墨の衣で御ん身をやつし
 さればこれから仏道の修行じゃ
 ぐ音に名高い比叡の山の
 峯に登りて菩提を求め
 昼はひねもす(若い方に)
 ア ソロワシャ ハヤサンカイ
 ガッテノシャリヨー
 ぐ昼はひねもす夜は夜もすがら
 月の光や螢を集め
 御経読書に(大衆方に)
 御心やつす
 ぐどうぞ末世の悪人女人
 悟る御法を学ばんものと
 修業すれども(大衆方に)
 悟りは見えず
 ぐそこで御身に思案をきわめ
 とても末世の悪人女人
 こんなことでは悟りにゆけぬ
 ぐただで助かる御法があれば
 教え給えと神々さまに
 願をかけれど その甲斐もなく
 ぐそこで泣く泣く六角堂へ
 毎夜毎夜の歩みをなさる
 ぐきららざかなるけんそうしのぎ
 音に名高いサテ白川の
 (コリャ大衆方に)
 ぐこうりたたえて御ん身を清め
 都ありたる六角堂の
 堂の板間に御ん手をついて
 ぐ願ひ上げます観音さまよ
 どうぞ末世の悪人女人
 ただで助かる御法があれば
 ぐともに衆生と手をひき合わせ

花の浄土へ参らんものぞ
 真の知識に会わせて賜べと
 ぐ毎夜毎夜の歩みをなさる
 百夜を満ずるそのあかつきに
 不思議なるかや
 ぐ不思議なるかや お告げをうける
 真に尊うとや観音さまよ
 まこと妙なる御声をあげて
 ぐ真の知識に会いたいならば
 都吉水円光大師 それに参りて
 悟りを聞けと
 ぐしごん験たな その御託宣じゃ
 されば比叡のみ山を下だり
 二十と九歳のその御年に
 ぐ真の知識のみもとにまいり
 他力本願まことの誓い
 神はとうがくみろくをはじめ
 ぐ下は在家の悪人悪女人
 知恵も力も修業もいらぬ
 おのが自力のはからいやめて
 ぐ弥陀に任せるただ一念に
 長の生死の迷いはなれ
 泣いて別れた親にも子にも
 ぐ会うて別れのない幸せと
 君に忠義は先ず第一に
 親に孝行忘れぬように
 ぐ夫婦仲好ききょうだい仲も
 他人に不実はいたさぬように
 国の大事と家業にはげみ
 ぐ御恩よろこびこの世はゆきと
 弥陀の本願まことの誓い
 そこうをたたえて
 ぐ上手で長いはアリャよいけれど
 下手の長いは欠伸の種じゃ
 こころあたりでチョイトやめた

- 〇「えんやら」と「川崎」
 演唱 富山市針原40
 又市盛好 ほか
 これは「忠臣蔵七段目」を主材にう
 たわれているが、「えんやら」はそ

のハヤシによる名であり、途中で「川崎」に踊りが変る。つまり同一詞章が異なっただけの振りであらうと思われるのが面白い。「川崎」では掛け合い問答式の表現が見える。演唱者たちはすでに故人、演唱は前後約14分にわたっている。

ㄨ サー コンヤトサーノエ
ゴホンジョウダーイ
(ナーンジャーイ サーンジャーイ)
ナーンジャーイ
サーコエワイヤ コリヤ
わしゃ チョイト 貫^もろんた
ゾーイ
(ヤラサーエンヤラ ヨンヤラダーイ)
アイ コリヤ ドージャイナ
お若い衆 はや(カ)しゃれの
コラ 先生方イノ
(サーラサ ドッコイショ)
アイ コリヤ ナンジャイナー
ここに説き出す演題は
余儀でないぞいよものきみ
忠臣蔵の(コ)七段目で
ことと細^{こま}かに読めないけれど
記憶をしたあらしを
悪声ながらも時間まで
(サーラサ ヨンヤセー)
ヨーイカデヤー
サーこの調子はやせヨーイ
(アラサー エンヤラ
ヨンヤラダーイ)
ハイ コリヤナンジャイナー
あたり見廻し由良之助
釣り灯籠のあかりを照らし
読み^{ながみ}長文^{みだい}は御台より
敵^{かたき}の様子^{ふみ}こまごまと
女の文で後や先き
(サーラサ ドッコイショ)
ヨーイカデヤ

サーこの調子で頼むぞイ
(サラサー アラ エンヤラ
ヨンヤラダーイ)
ハイ コリヤ ナンジャイナー
釣り灯籠のあかりを照らし
(中畧)女の文で後や先き
(サーラサ ドッコイショ)
はやしが上手だ ガッテノ
カンヨ
(ヤーサ ソーダイ
ガッテノカンヨ)
さらばこの勢^{せい}でや
もう一つ頼むぞーイ
(ヤラサー エンヤラ
ヨンヤラダーイ)
ハイ コリヤ ナンジャイナー
よその恋よとうらやましく
お軽^{かる}上より見下ろせば
夜目遠目なり字性^{じしょう}もおぼろ
思いついたるのべ鏡
出して写して先生方イノ
(サーラサ ヨンヤセー)
ヨイ ヨイカデヤーハイ
サーはやし声が頼りだーイ
(ヤラサー エンヤラ
ヨンヤラダーイ)
サテ キリリントコイ
(サテ ドッコイマカショ)
ハイヤ リンマーセージャイ
コレワイドートコ ヘンナハイ
(アララトセーヨイカノショー)
ヨラーモサ ハハーンヨイ
サテ コレカ サーテこれから
コレワイなーにごとよ
サテモこれから申そうやならん
二十八日御日柄なれば
きょうはゆるりとお茶飲むまい
か
アリヤ コノセーカイナ
コレワイドートコ ヘンナハイ
(アリヤリヤトセーヨイカノショ)

あまり当世とうせいのせわしきままに
 売るの買えので日夜にちを明かし
 濟むの濟まぬと子孫こそんのことに
 腹も立てたり笑いもしたり
 罪業ざいごうばかりで月日を暮らす
 大慈大悲の御恩のことも
 こだい(懈怠)ばかりで年月
 送る
 きょうも空しく過ぎゆくことは
 電光稲妻矢いなづまを射る如く
 きょうの御恩があるまいならば
 アリヤ ソノセーカイナ
 コレワイドー トコヘンナハイ
 (アリヤリヤトサーヨイカノショ)
 アリヤ今に無常の日暮れとなれば
 耳も聞こえず眼力がんりききかず
 足手まといの妻子くわたりや孫や
 金銀財宝家蔵田畑
 山も林もみな打ち捨てて
 持ちもならねば持たせもならず
 死出の山路さんずや三途の大河
 阿あぼう羅刹らせつに追い立てられて
 アリヤ ソノセーカイナ
 コレワイドートコ ヘンナハイ
 (アリヤリヤトサー
 ヨイカノショ)
 アー一人ひとり泣く泣くえん魔の庭
 に業ごうの秤はかりや浄玻璃鏡
 向うその時言い訳たためぬ
 右も左も剣の山に
 追いつ追われつ幾千万劫ごう
 焼かれ焦がされ身を切り裂かれ
 こぼす涙に天をば仰ぎ
 大地たたいて七転八倒
 泣けど叫べどその甲斐もなく
 聞くもおそろしガッテノカンヨ
 (ヤーサ ソーダイ ヨーカノ
 カンヤイ)
 アー聞くもおそろし地獄の苦吟
 のがれ難きはわが身の上ぞ
 数の仏の御慈悲にもれて

ととも叶かなわぬ悪人なりと
 見捨てられたる大罪人を
 阿弥陀如来は助けんために
 五劫ごうし思惟しに思いを砕き
 阿鼻あびの炎や紅蓮ぐれんの氷
 毒の中にも幾千万劫ごう(アリヤ)
 わたし一人のその身代りに
 あなた一人の身にひきうけて
 一願積んでも衆生がために
 一行積んでも女人(サ)がためと
 汗やあぶらの御修業中に
 施ほどこし給おんみいし御身の肉は
 越後川の砂の如く
 与え給いし御身の骨
 千須弥山せんじゆみせんの如しとあるぞ
 アリヤ ソノセーカイナ
 コレワイドートコ ヘンナハイ
 (アリヤリヤトサ ヨーイカノセ
 ー)
 アリヤ ヨイカイヤ コリヤ
 もう一つたのむぞ
 (ヤラサー エンヤラ
 ヨンヤラダーイ)
 アイ コリヤ ナンジャイナ
 まだもまだもとやりたいけれど
 もはや夜中も時刻の頃と
 ままにならぬは演芸の時間
 チョイトこここで踊り変えて
 楽しむぞ
 変える踊りは何なれど
 「川崎」踊りでござります
 (サーリヤサー ヨイヤセー)
 ヤーレ コ コーノセジャ
 ヨイヤナク ごーざれやー
 (サーリヨイ サーリヨイ)
 ヤーカ ドージャカイーナ
 あたり見廻し由良之(コ)助
 エ釣り灯笼のあかりを照らし
 みてはこれはみたがきより
 仇かたきの様子はこまごまと
 女の文の後や(カ)先き

参らせ候ではかど(コ)らず
 よその恋よと羨しくは
 お軽は上より見おろ(コ)せど
 若い様や先生方イノト
 (サーリヨイ サーリヨイ)
 ヤーハー ドージャカイーナ
 お軽は上より見下ろ(コ)せば
 夜目遠目なり字性もおぼろ
 思いついたる伸べ鏡
 出して写して読み取る文章
 エ 下より九太(ヤキ)夫が
 ア 振り下ろす文
 椽の下にはな^{えん}おやきつ^の
 椽の下にはな^{えん}おやきつ^の
 若い様やドージャカエーノ
 はや(カ)しゃれの先生方イノ
 (サーリヨイ サーリヨイ)
 ヤーハ ドージャカイーナ
 ア 神ならず神ならず
 仏がかりしお軽がまた
 エ たもおきい玉落とせば
 下にはハッとまた見上げて
 うしろへと
 エ 隠す文^{かみ} 先生方イノ
 (サーリヨイ サーリヨイ)
 サーランバ コノセージャ
 もうひとつはやせ ヨーイ
 (サーリヨイ サーリヨイ)
 ヤーハ ドージャカイーナ
 椽の下にはなおえつぽ
 上には鏡のかけ隠す
 ヤ マア 由良さんか由良さん
 か そもじゃそこになにしてぞ
 わたしゃお前さんに もりつぶ
 されて 風に吹かれているわいの
 の

ウーン ハテや この(マ)風
 に吹かれてかいナ
 お軽チョット チョット
 話^{はな}したい(マ)ことがある
 話したい(マ)ことがある
 下りてたもらぬか
 ヤー話したい 話したいと
 といとこ アーマ 天の川で
 ここから言われぬ
 チョット チョット下りてたも
 らぬか
 ヤーア この梯子はどうやらま
 た勝手は違うて ここはどうや
 ら
 危ないものじゃ
 ヤヤヤーだんない だんない
 危いこわいは昔のこと
 いまは三間^{さんげん}い^{また}つ^{また}股^{また}い^{また}でも
 赤のこうやく要らぬ年^{とし}ばい
 ヤヤヤーあこいはふしない
 舟に乗ったようでこわいワイナ
 ー
 エ どれかでござだきますッ
 船玉様が見えまする
 ヤーのぞかんすイナ
 ヤ 洞庭の秋のこまた いまさ
 んげんうつわだいの 赤のこ
 うやくいらなかいえど 若い様
 やコラ ヨイト ハヤセー
 (サーリヨイ サーリヨイ)
 ヤーハ ドージャカイーナ
 次の先生と^{こう}交^{こう}た(カ)いで
 若い様や ヨイト ハヤセ
 (サーリヨイ サーリヨイ)
 サーランバ コノセージャ
 先生に渡すぞイ

私はこれら多数の「盆踊り唄」に接して、なんとも名状し難い感動を覚えるとともに、たくさ
 んの疑問と謎に突き当たって悩むのである。これらの古民謡が「盆」の名が冠せられているところ
 から、仏教信仰と盆行事に関連する芸能かとも思い、一応「仏事に関する」ものとして分類し
 ては見たものの、これらの「盆踊り」と「唄」は、現代的に寺院の保護奨励を得ているとはい
 得ないし、また8月13日から8月18日に至る、いわゆる盆期間を中心に行われているが、溯って

7月の頃合いから、10月の秋祭りの季に至る期間中にも行われている。行われる場所は寺院の境内よりも、むしろ神社の境内、学校の庭、工場のグラウンド、町や村の広場で行われるなどの点で、仏事的色彩が薄くなっていると見てよい。また「盆踊り唄」の詞章について見ても、仏教思想や教義に関するものが、必ずしも多いとは言いがたい。昭和29年6月発行の「富山県中部音頭民謡協会」による「音頭歌集」には、太閤記（尼ヶ崎の段）、仮名手本忠臣蔵（3・5・7・8・9段目）の、いわゆる「段物」の分量が最も多く、それに「鈴木主水白糸くどき」「白井権八小紫くどき」「阿波鳴門順礼くどき」「八百屋お七吉三くどき」「お吉清三くどき」など、情死を主材にした「口説き物」を加えた分量は、「目蓮尊者地獄巡り」「歓喜嘆」などの「説教物」の分量を二倍以上に超えている。ほかに「神代の巻」や木遣り音頭の各種を加えた分量にくらべると、仏教行事に関連する内容の唄は案外にすくない。しかも「盆踊り」と「唄」は、仏教伝来以後の芸能であるのか、との疑問に対し、明快に「然り」と断ずることが出来ない。現在のうたわれている詞章は、仏教伝来以後のものであっても、その踊りは仏教伝来以前、古神代よりの民族的芸能であると思わざるを得ないのである。ちょうど沖繩には、仏教、儒教、キリスト教などに深く影響されない思想や信仰から誕生した、踊りや唄や芸能が、古代から現在に伝承されているのと同じくはないか、と思われるのである。

「盆踊り唄」はその形式が千差万別、複雑で多岐にわたる内容と豊かな包容性の故に、その中からたくさんの現代的民謡や芸能を生んでいる。富山県について言えば、魚津市の「せり込み蝶六」は、同市の山手地区で行われる盆踊りの、要素踊りの一つである「蝶六」が、ステージ上の芸能として精練されたものであり、滑川市郊外の盆踊りの要素である「二つはねそ」が、「新川古代神」の母胎であるなどである。このような例は、全国至るところに見られるのではないか。また逆に盆踊りは、別の新しい民謡や踊りを吸収しながら、新しい時代に生き永らえていく。例えば「越中おわら」が、富山県各地方の盆踊りの末尾の部分に加えられている現実が、その証左である。「盆踊り唄」の多様性は、その受容性の豊かさによるのであり、新しい時世に応じて変容し、新しい生命に息づいて伝承されていくところに、この古民謡芸能の本質が存在すると思われるのである。

私はこの叙事詩による不思議な民謡と踊りの類例を、西欧の古謡と舞踊に求めることが出来るかを考える。明治初年以来、わが国に移入された西欧音楽は、キリスト教以後のものか、すくなくともキリスト教文化の洗礼を経たものである。盆踊りの音楽を仏教伝来以前からのものとして、それと軌を同じくするものとの考えに立てば、キリスト教以前の叙事詩と音楽、そして舞踊への考察は、必然的にギリシャ、そしてホメロスの叙事詩「イーリアス」「オデュッセイア」に、或いはそれ以前にまで溯らざるを得ないであろう。

ギリシャ音楽は歴史的に、叙事詩時代、叙（抒）情詩時代、劇詩時代に区分される。これらは詩と音楽、そして舞踊、演技が一体的に表出されたのが特長であるし、その音楽はいわゆる複音楽的な発展を示さなかった特長をも含んでいる。それは詩曲一体的表現を目した音楽の特性であろう。叙情詩音楽は音楽家のロマンチックな個性が強く表出されたので、詩内容の芸術的表現は細微で微妙な故に、庶民的、大衆的な広さを保たなかったと思われるし、劇詩音楽はステージ上の表出になったので、勢おい大衆庶民は鑑賞的立場に置かれざるを得なくなった。従ってわが盆踊りとの契合は叙事詩音楽に求めねばならない。劇詩音楽も叙情詩音楽も、なべてギリシャの音楽は、「ホメロスに還り、ホメロスに興る」と譬えられているが、ホメロス（Homerus=Homer ca800—750 B.C）に関する事柄は、古代における伝説の霧につつまれて、その伝承にも一致がないとする説もある。しかし彼の作として伝えている英雄叙事詩「イーリアス（Ilias）」は「オデュッセイア（Odysseia）」とともに、紀元前8世紀頃の作とされている。前者は15693行、24巻に

分けられた長大詩、英雄「アキレウス」を中心にした物語りで、巧みな会話を用い、多くの型の人物を登場させ、戦場と家族が離別している悲哀、或いは陰惨な苦痛から解放された牧歌的な情景の挿入、怒りと笑いと憂いの感情を、或いは機智と鈍重の相反する性格が巧みにうたわれていると解説されている。この事情はわが「太閤記」などに通ずるものがあるのではないと思われるのである。後者は12110行、やはり24巻に分けられた叙事詩で、トロイ戦争から帰国するオデュッセイアが、海神の怒りにふれて、オギュギアの島にとどめられる。その間に彼の妻が故国で難に遭うなど、その筋は複雑膨洋のようである。而うしてこれらの叙事詩が語られ、どのようにうたわれたのであろうか。

「イーリアス」と「オデュッセイア」、この叙事詩の断片を歌い歩いた歌手を、ラプソードス(Rhapsodos)といている。後世ラプソデー(Rhapsody=狂詩曲)と称して、狂想的で自由な形式の器楽曲が作られた。これは民族色豊かで叙事的性格をもつ音楽であり、その語源はラプソードスであることは確実である。ラプソードスが、どのようなリズム、メロディーで、この叙事詩を歩きながらうたったのであろうか。或いは踊りながらうたったのであろうか。つまりどんな節でうたわれたのか。それは詳らかにされていないのが通説である。現在ギリシアにおいても、これを再演し得る叙事詩的資料が無いとさえ言われている。わずかに、その旋律は叙事詩朗誦のため、音階、旋律はうたい下げられたとする理論が見える。これに対しリズムに関する理論が割合明らかにされている。踊りにマッチする音楽の旋律にとっては、リズムと拍子は重要な要素である。

詩脚(Podes)として、長短を異にする2音ないしそれ以上を組合わしたという。その基本的詩脚は

- | | | |
|------------------------------|--------------|---------------|
| (1) 2・4拍子系のダクテュロス (Dactylos) | (1) Dactylos | — ∪ ∪ = ♩ ♩ ♩ |
| | | ∪ ∪ — = ♩ ♩ ♩ |
| | | — — = ♩ ♩ |
| (2) 3拍子系のイアンボス (Iambos) | (2) Iambos | ∪ — = ♩ ♩ |
| | | — ∪ = ♩ ♩ |
| (3) 5拍子系のクレティコス (Kretikos) | (3) Kretikos | — ∪ — = ♩ ♩ ♩ |

で、これらの脚を重ねて一行の律とし、これをヘクサメトロス (Hexametros=六脚律) と称した。ヘクサメトロスを重ねて一節として、長い詩を区切りながら続唱したと考えられる。

Hexametros

— ∪ ∪ | — ∪ ∪ | — ∪ ∪ | — ∪ ∪ | — ∪ ∪ | — ∪ ∪ |

又は

— ∪ ∪ | — ∪ ∪ | — ∪ ∪ | — ∪ ∪ | — ∪ ∪ | — ∪ ∪ |

— ∪ ∪ | — ∪ ∪ | — ∪ ∪ | — ∪ ∪ | — ∪ ∪ | — ∪ ∪ |

♩ ♩ ♩ | ♩ ♩ ♩ | ♩ ♩ ♩ | ♩ ♩ ♩ | ♩ ♩ ♩ | ♩ ♩ ♩ |

♩ ♩ ♩ | ♩ ♩ ♩ | ♩ ♩ ♩ | ♩ ♩ ♩ | ♩ ♩ ♩ | ♩ ♩ ♩ |

—富山市— 盆踊り唄「松栄」のリズム

ハヤシ ♩ ♩ ♩ | ♩ ♩ ♩ | ♩ ♩ ♩ | ♩ ♩ ♩ | ♩ ♩ ♩ | ♩ ♩ ♩ |

うた ♩ ♩ ♩ | ♩ ♩ ♩ | ♩ ♩ ♩ | ♩ ♩ ♩ | ♩ ♩ ♩ | ♩ ♩ ♩ |

♩ ♩ ♩ | ♩ ♩ ♩ | ♩ ♩ ♩ | ♩ ♩ ♩ | ♩ ♩ ♩ | ♩ ♩ ♩ |

盆踊り唄「松栄音頭」 一富山市一

黒坂 富治 採譜

ハヤシ(ヨイヤサー ヨーイヤ サ) さてーも めづら しやー
 ーしん じゅうや ばなー し(アラドッコイ ショ)と ころ よつー
 やの しんじゅく まちにー (ヨイヤサー ヨーイヤ
 サ) こんの のれー んにー ききょう の もんー
 は(アラドッコイ ショ)おとーに きこー えし はしもと
 やとー てー (ヨイヤサー ヨーイヤ サ) あ
 まーた じょうー しゅのー かず ある なかーに(アラ
 ドッコイ ショ)さてーも めづら しや コリヤなに
 ごとーでー (ヨイヤサー ヨーイヤ サ) と
 しーは じゅうー くでーとう せが そだーち(アラ
 ドッコイ ショ)あ いーけう よけーれば みなひと さまー
 にー (ヨイヤサー ヨーイヤ サ)

また脚律の中央に、句読 (Caesura) を挿入して前図のように、これを音符に書いて図のようなリズムを示している。これと富山市の盆踊り唄「松栄音頭」の採譜から抽出したリズム型を比較すると、共通のリズムが見られる。いずれにしても単純な2拍子の基本型と、極くわずかに変化したリズムであることがわかる。また楽譜によって、前記の「旋律の下向性」も共通であることがわかる。

次にギリシヤ叙事詩の技法として挙げられていること、そしてホメロスの特徴として書かれている点の二、三を抽出して見ると

(一) 先きに挙げたヘクサメトロスは、ギリシヤ語の構造とは、マッチしないリズムなのに、ホメロスはこの詩脚の中へ、ギリシヤ語が容易にうたわれるように、いろいろな表出を当てはめた。そのために

- ㊶ 古い時代、新しい時代のギリシヤ語やいろいろな形の方言を混用した。
- ㊷ また特定の形容詞も、古いものと新しいものが混在したので、一つの叙事詩表現に矛盾を生じているという。

(二) 叙事詩は本来語り物なので、聴衆に対して、一つの場合や場面を生き生きとアピールするため、前後の筋書き、脈絡、関係を重視しない。即ち論理的な文章表現や文法的な正しさが無視されることもすくなくない。

以上のことはわが「盆踊り唄」に照合して見ても頷き得ることである。さらに

(三) 同じヘクサメトロス (詩型、脚律) を重ね、繰り返かしているので

- ㊸ 軽くて快適なテンポであり
- ㊹ 楽しい感情をもたらす
- ㊺ 特殊な人工語を加えていること、これはわが「盆踊り唄」における、理解し難い特殊なことば、或いはハヤシことばと同趣のものではないか。

(四) ホメロスの言語が技巧的であるが、その反面

- ㊻ 単純
- ㊼ 日常会話のように自由で
- ㊽ 物語りの変転展開にスピードがあり
- ㊾ 場面の变化は会話によってなされる

など、要するに叙事詩の表出ではあるが、演劇表現における深刻さがなく、民謡と踊りらしい軽妙さと、流動的な明快さが充溢していたのであろう。そしてこのことは、詩中の英雄、騎士たちが、予想される死への重圧感があっても、表現としては朗々としており、その点「盆踊り唄」の口説き物に見られる、情死や心中の表現が、悲哀にのみ墜ちていないのに通じてはいはしまいか。

ギリシヤ音楽においては、詩と音楽が一体であり、それは総合芸術の一つの理想を示している。音楽や芸術が、本然の人間性、自然性を失なうと、つねに「古典に還れ」と反省されるのは、ギリシヤの詩曲一如の精神に戻るための反省を指すのであろう。ラブソードスは歩きながら、踊りながら叙事詩をうたった。踊りながら自らの詩作を加えてうたう。自らこれをうたい自ら踊る。そこに瑞々しい総合芸術としての音楽創造が顕現されるのである。わが「盆踊り唄」にも、その事情を証明する生きた例がある。

。「廻り踊り (富山県名所名産尽し)」

演唱 中新川郡上市町北島69

山本金太郎 ほか

「廻り踊り」は組踊りの最初に配さ

れる輪踊りである。演唱者はこの地方の各種音頭、民謡を能くするほか、「樺太甚句」にも通ずる練達者。自作した次の新しい詞章を踊りながら

演唱した。まさしくギリシアのラブ
ソードスである。所要時間約7分。

- ㄣハリヤ コーイトサーノ
オージュダーイ
(ナーンジャイ サーンジャイ)
ナーンジャイサーノ
コレワイヤ
コリヤ 踊り衆が揃^{そろ}んでナーイ
(ヤラソーイ エンヤラノー
ヤラダーイ)
ㄣハイ コリヤ ドーjayイナ
富山県はよいとこ(ン)ろ
東の空を眺^{たてやま}むれば
雄々しくそびゆる立山よ
清くそびゆる^{つるぎだけ}剣嶽
やさしく見える^{さおこめ}早乙女よ
(サーリヤサ ヨイヤナー)
ㄣアイ コリヤ ドーjayイナ
後生^{ごしよう}大事^{じようどざん}の浄土山
御利益^{りやく}あらたな薬師岳
この山々^{さんざん}をもととして
若い衆やナ 先生方イナ
(サーリヤサ ヨイヤナー)
ㄣアイ コリヤ ドーjayイナ
流れ出でくるその川はよ
黒部川から片貝川よーイ
早月川からコレ ドーボンジャ
若い衆やナ 先生方イナ
(サーリヤサ ヨイヤナー)
ㄣハイ 常願寺川、庄川、^{おやべ}小矢部に
神通川^{じんづう}
なな^{なな}せん^{せん}
七大川のその川よ 大衆方イナ
(サーリヤサ ヨイヤナー)
ㄣハイ コリヤ ドーjayイナ
豊かな水の(サ)力にて
おこす電気は国の基^{もと}
エー産業王国富山県
(サーリヤサ ヨイヤナー)
ㄣハイ コリヤ ドーjayイノ
豊富な水に(サ)育^{はぐ}くま(ン)れ
実るお米の味のよさ

「豊年越路」に「越光」
これに負けぬとよまさり
今を売り出す「日本晴」

- (サーリヤサ ヨイヤナー)
ㄣハイ コリヤマタ ドージャン
味と粘りの「大正^{もちろ}糰」
昔も今も皆様よーイ
お嫁^{みよめ}の土産^{みやげ}にゃ日本一
食べた^たらうまいぞ富山米
(サーリヤサ ヨイヤナー)
ㄣハイ コリヤマタ ドージャン
あまた産業もあるけれど
とりわけ優^{すぐ}れた富山の菓
津々浦々まで行きわた(ン)り
保健衛生のためにとて
若い衆やナ先生方イナ
(サーリヤサ ヨイヤナー)
ㄣハイ 三百余年の昔より
先用後利で守りぬく
今じゃ他国へ輸出して
諸外国にも喜ばれ
(サーリヤサ ヨイヤナー)
ほんに富山はよいところ
若い方上手(ン)じゃのーイ
(ヤラソーイ エンヤラソイ
ヤラジャーイ)
ㄣハイ コリヤ ドーjayイナー
富山湾と眺れば
佐渡と能登との間より
金波銀波が押しよせる
とてもきれいなその海で
育^{さかな}つ肴^{さかな}の味のよさ
(サーリヤサ ヨイヤナー)
ㄣハイ コリヤ ドーjayイナー
四季に漁獲^{ぎよかく}の絶え間なく
鱈^{たら}や鯛^{たい}の(サ)味のよさ
刺身のうまい福来魚^{ふくらぎ}や
でかい切り身は鱒^{ぶり}魚^{まぐろ}ーイ
歳^{とし}取り肴^{さかな}じゃ日本一
(サーリヤサ ヨイヤナー)
エーヨイカデヤ ハ コリヤ

はやし
 囃子ごえ上手 (ン) ジャゾーイ
 (ヤンサー エンヤラソイ
 ヤラジャーイ)
 ㄱハイ コリャ ドー جائイノ
 水の中から光を放つ
 観賞魚ぎよの (サ) 螢ひらいか
 食べておいしい土産みやげによろしい
 どうか一度は皆様よ
 食べて見やのせ先生方イナ
 (サーリャサ ヨイヤナー)
 ㄱハイ コリャ ドー جائイノ
 五・六月の (サ) その頃に
 どんより曇った沖合しんきろういに
 きれいに浮かぶは蟹気樓

これも世界で珍しチャーイ
 見たか見ぬかは客まかせ
 (サーリャサ ヨイヤナー)
 ㄱハイ コリャ ドー جائイノーイ
 名所名所もまだまだあれどーイ
 他府県のお客さ (ン) ま
 一度は富山に来ておくれ
 若い衆やナ 先生方イナー
 (サーリャサ ヨイヤナー)
 ㄱハ ヨイカデャ ハ コリャ
 いまよく揃そろんだゾーイ
 (ヤーラソイ エンヤラソイ
 ヤラジャーイ)

音楽や踊りは人間を離れてあり得ない。人類の発祥とともに音楽と踊りはあった。叙事詩音楽は人類に共通する総合芸能(術)として発生し発展したのではないか。日本とギリシア、海を距てて、それぞれの叙事詩が併行的に誕生し伝承されたのではないか。現実には再現することが出来ないとされているギリシア叙事詩の幻影が、わが盆踊りとその唄に写し出されているのではないか、と思われるのである。私はこの仮想的契合を抱きながら、さらに各般の考察を試みたいと思う。